

ブルーストック実装に向けた各種雨水タンクの水質調査

福岡大学 工学部 学生員○内田歩里 正員 渡辺亮一・浜田晃規
 福岡大学水循環・生態系再生研究所 非会員 角銅久美子

1. はじめに

近年、日本では地球温暖化の影響により集中豪雨など異常気象の発生頻度が増加している。地球温暖化防止は、国際社会全体の緊急の課題であり、日本でも2020年10月に、2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてニュートラルにする『カーボンニュートラル』を目指すことを宣言している。この宣言により、各企業も2050年までにカーボンニュートラルの達成を目指し、取り組みを進めている。

集中豪雨による内水氾濫の浸水被害が頻発している状況を鑑みて、国土交通省は令和2年7月6日に新たな防災・減災プロジェクトを取りまとめ、これまでの治水の方針を大きく転換する方針を示している。その中で「あらゆる関係者により流域全体で行う『流域治水』へ転換する¹⁾」との今後の治水の方向性が明記されており、今後は流域に関わる全関係者が主体的・

積極的に治水に取り組むことが求められている。そこで、タンクに雨水を貯留し、家庭で使う生活用水の一部を雨水利用により確保しようという取り組みがある。雨水タンクを使うと、水道管から排出されるCO2の量を削減することができ、雨水タンクは日用水として使えるだけでなく、同時に水を貯めることができるため、防災対策（流域治水）にもなる。しかし、防災対策としての役割を果たすためには、ただ貯めるだけでなく、貯めた水をちゃんと使うことが大切である。本報では、雨水タンクの種類（材質）だ使用可能な範囲を明らかにするため、雨水タンクの材質毎の水質について考察する。

2. 研究目的

1) **水位変動**：雨水貯留タンクの中に設置した水位計でタンクの中の水位を調査し、各タンクの使用状況を明らかにする。

2) **水質**：過去数年に渡る水質分析をもとに、雨水貯留タンクの材質、設置場所の違いにおける水質変動を明らか

表1 材質別貯留タンクの採水場所・期間

雨水タンク種類等	採取場所	測定開始
①地下コンクリート製(第一槽)	雨水利用実験住宅	2012.5
②地下コンクリート製(取水槽)	雨水利用実験住宅	2012.5
③地下コンクリート製(8t)	早良区西新保育園	2014.5
④地上コンクリート製	福岡大学内科学センター	2016.10
⑤ポリエチレン製(750L)	城南区田島	2012.11
⑥ポリエチレン製(1000L)	城南区田島	2012.11
⑦ポリエチレン製(750L)	中央区笹丘小学校No.1	2014.8
⑧ポリエチレン製(750L)	中央区笹丘小学校No.2	2014.8
⑨ポリエチレン製(200L)	中央区笹丘小学校No.3	2014.8
⑩ポリエチレン製(1000L)	中央区友泉中学校	2018.5
⑪塩化ビニル製(200L)	城南区西片江	2012.11
⑫塩化ビニル製(200L)	城南区東油山	2012.11
⑬塩化ビニル製(200L)	城南区鳥飼	2012.11
⑭塩化ビニル製(200L)	城南区田島	2013.10
⑮プラスチック製(アクアブリック)	雨水利用実験住宅駐車場下	2012.6

表2 タンクの使用偏差値

地点	満水時の水位との差の平均	偏差値	使用頻度	
田島3(1000L)	0.735	71.8	多い	
鳥飼	0.551	56.6		
笹丘小1(750L)	0.525	54.5		
田島2(750L)	0.501	52.5		
笹丘小2(750L)	0.460	49.1		
田島1(200L)	0.442	47.7		
西片江	0.354	40.4		
友泉中	0.335	38.8		
東油山	0.331	38.5		少ない
平均	0.470			
標準偏差	0.121			

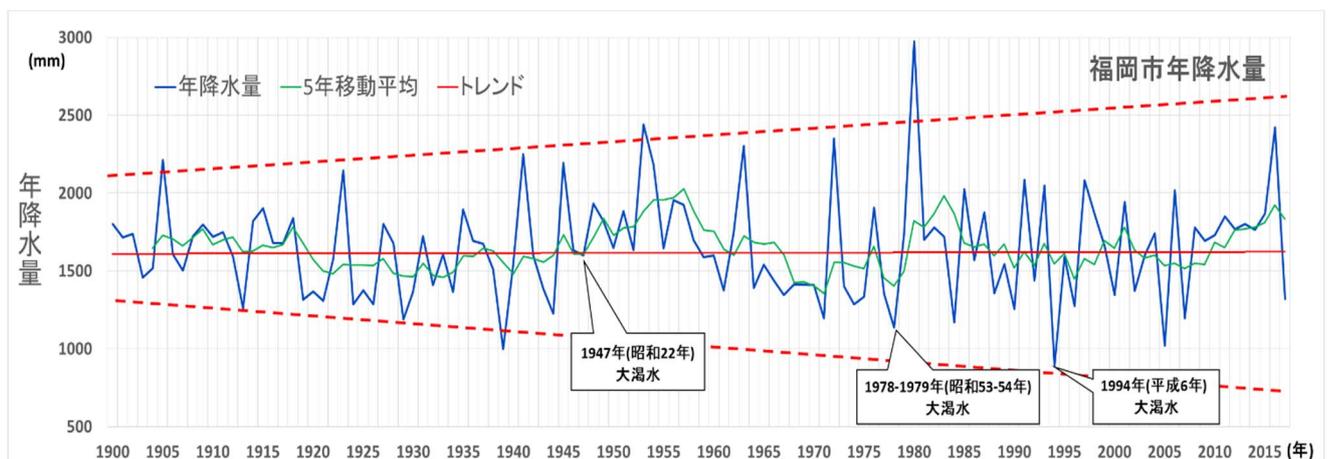


図1 1900～2017年間の福岡市における年間降水量推移

にする。

3)利用可能性：材質の異なる雨水貯留タンクに貯めた雨水をどの程度まで利用できるか検討する。

3.研究方法

- 1)自己記録式水位計を用いて、樋井川流域内にある材質の異なる雨水タンクに設置し、10分間隔で水位を観測。
- 2)転倒マス形雨量計を用いて、雨水利用実験住宅、雨水ハウス、堤・田島・笹丘小学校の計5地点に雨量計を設置し、10分間ごとの降雨量を観測。
- 3)水質実験の対象となるタンクの採水場所と期間を表1に示す。なお、水質実験は毎月一度、雨水貯留タンク内の水を採水し、採取したサンプルは実験室に持ち帰り水質分析を行った。

4.研究結果

1)水位変動：表2は、自己記録式水位計を用いて観測した水位変動を元に、各タンクの使用偏差値を求めた値を示している。この値が大きいくほど、タンク内の貯留雨水の使用頻度が高いことを示している。この値より、容量が大きなタンクほど使用頻度が高くなる傾向にあることが分かる。

2)水質：表3は、タンク材質毎の大腸菌・大腸菌群数の検出結果を示している。この値より、タンクの材質および設置場所などによって、検出される個数に違いがあることが分かる。次に、表4は、タンク内貯留水のSS濃度、pH、COD濃度、NO₂濃度の値を示している。この

値より、タンクの材質によってこれらの値に差異が生じていることが分かる。

5.考察

1)水位変動と水質の関係：表2より、田島3(1000L)のタンクは使用偏差値が極めて高く、よく貯留水が使われていることが分かる。西片江、友泉中、東油山は使用偏

表4 材質別測定結果 (SS, PH, COD, NO₂)

コンクリート製タンク	第一槽	取水層	西新保育園	科学センター1	科学センター2	科学センター3
SS (1.4mg/以下)	測定回数	84	84	48	16	16
	基準値を超えた回数	22	2	17	4	5
	割合	26.2	2.4	35.4	25.0	31.3
PH (5.8以上8.6以下)	測定回数	84	83	46	14	14
	基準値を超えた回数	43	54	31	5	7
	割合	51.2	65.1	67.4	35.7	50.0
COD (3mg/以下)	測定回数	85	85	49	11	11
	基準値を超えた回数	6	2	3.0	11	10
	割合	7.1	2.4	6.1	100.0	90.9
NO ₂ (0.04mg/以下)	測定回数	81	81	48	14	14
	基準値を超えた回数	7	3	13	1	1
	割合	8.6	3.7	27.1	7.1	7.1

ポリエチレン製タンク	750L	1000L	笹丘小1	笹丘小2	笹丘小3	友泉中
SS (1.4mg/以下)	測定回数	79	75	39	43	20
	基準値を超えた回数	26	20	15	13	5
	割合	32.9	26.7	38.5	30.2	25.0
PH (5.8以上8.6以下)	測定回数	73	69	38	42	21
	基準値を超えた回数	26	28	33	34	17
	割合	35.6	40.6	86.8	81.0	81.0
COD (3mg/以下)	測定回数	80	76	39	43	21
	基準値を超えた回数	3	5	7	7	0
	割合	3.8	6.6	17.9	16.3	0.0
NO ₂ (0.04mg/以下)	測定回数	77	73	39	40	23
	基準値を超えた回数	2	4	1	1	0
	割合	2.6	5.5	2.6	2.5	4.3

塩化ビニル製タンク	西片江	東油山	鳥飼	田島	プラスチック製タンク(アクアブリック)	駐車場
SS (1.4mg/以下)	測定回数	74	75	68	56	SS
	基準値を超えた回数	34	15	20	11	(1.4mg/以下)
	割合	45.9	20.0	29.4	19.6	14.3
PH (5.8以上8.6以下)	測定回数	68	67	60	53	PH
	基準値を超えた回数	54	55	40	8	(5.8以上8.6以下)
	割合	79.4	82.1	66.7	15.1	11.4
COD (3mg/以下)	測定回数	76	75	69	57	COD
	基準値を超えた回数	3	1	6	5	(3mg/以下)
	割合	3.9	1.3	8.7	8.8	1.2
NO ₂ (0.04mg/以下)	測定回数	72	73	70	53	NO ₂
	基準値を超えた回数	1	1	4	9	(0.04mg/以下)
	割合	1.4	1.4	5.6	12.5	0



写真2 ポリエチレン製



写真3 塩化ビニル製



写真1 コンクリート製

表3 材質別測定結果 (大腸菌・大腸菌群)

コンクリート製タンク	取水層	第一槽	西新保育園	科学センター1	科学センター2	科学センター3
測定回数	37	37	29	14	14	14
検出回数(大腸菌群)	0	11	4	7	8	8
検出回数(大腸菌)	0	0	0	0	0	0

ポリエチレン製タンク	750L	1000L	笹丘小1	笹丘小2	笹丘小3	友泉中
測定回数	37	33	28	31	13	6
検出回数(大腸菌群)	20	13	13	15	3	2
検出回数(大腸菌)	1	0	2	2	0	0

塩化ビニル製タンク	西片江	東油山	鳥飼	田島	プラスチック製タンク(アクアブリック)	駐車場
測定回数	35	37	30	36	測定回数	37
検出回数(大腸菌群)	10	20	11	8	検出回数(大腸菌群)	6
検出回数(大腸菌)	0	3	0	1	検出回数(大腸菌)	0

差値が低く、あまり貯留水が利用されていない状況にあることが確認された。この結果は、タンクのサイズによって使用する目的が違うことが想定され、ガーデニングのみに使用されている小型タンクよりも、洗車や野菜などの洗浄に広く雨水を活用しているタンクの方が、流出抑制効果が大きいくことが分かる。表3より、コンクリート製タンクでは、大腸菌は検出されておらず、ポリエチレン製と塩化ビニル製においてもほぼ検出されていないことが確認された。また、大腸菌群においても、コンクリート製タンクでの検出量が少ないことが分かる。ポリエチレン製のタンクだけで比べてみれば、使用偏差値の高い1000LのタンクはSS、PHともに低い値を示しているが、全体的に比べてみると、使用頻度が高いタンクの方がSS、PHの値が基準値内に収まっているとは言えないことが分かった。今後SS、PH以外の水質項目についても同様に検討する必要がある。

2)利用可能性：コンクリート製タンクは、外部からの影響を受けにくく良好な雨水利用が行えることが分かった。その一方で、ポリエチレン製タンクは、外部からの影響を受け易いため利用用途を考える必要がある。しかし、設置が比較的簡単のため、利用用途に応じて雨水を活用することが重要であると考えられる。